

随想 アーやんの弁当

椋 垣 七 郎

(会員・佐伯市下久部)

昔の小学校には、現在のようない食糧などはなく、子供達はそれぞれの家庭に応じた弁当を持って学校に通っていた。

概して田舎の子供の弁当は質素なもので、一年を通じて梅干し、漬物が主菜のものが殆んどであった。

五年生ぐらいの時の或る日、M君が「朝急いで家を出たので弁当を忘れた。」と言って、みんなが弁当を食べている時に、淋しそうな顔で天井を仰いで耐えていた。

それを見たアーやんが「俺の弁当を半分やるわい。」と言って、自分の弁当箱の蓋に飯を半分に分け、その上におかずの味噌も半分載せ、箸の代りに鉛筆二本を添えて「これで食え」とM君に差し出した。

アーやんのその日の弁当のおかずは味噌だったのである。

M君ははじめ「いらん。いらん」と遠慮していたが、

アーやんに何度も「食え」と言われると「ほんならもらおうか。おおきに」と言って二本の鉛筆で食べはじめた。

そのM君の表情には、こみ上げてくるものを懸命に抑え、涙をこらえているような様子がうかがわれた。

M君は「弁当を忘れた」と言ったが、それは言い訳で、本当はその日の弁当に詰める飯がなかったのではないかということ、同じ集落に住み、M君の家庭を知るアーやんは察していたのである。

そんなM君に弁当を分けてやったことを、彼は誇るでもなく恩に着せるでもなく、何事もなかったように午後の授業についた。

私は子供ながらアーやんの心の温かさに打たれ「アーやんにはかなわんのう。」と思ひ、彼に対して或る種の劣等感と憧れに似たものを心に抱いた。

彼はクラスで体も一番大きく、誰からも好かれる温厚で、大らかな心の持ち主であった。

そのアーやんも、M君もすでに亡い。

あの日の教室の光景だけが、今も私の胸に鮮明に焼きついているのである。

